

## 質的研究と境界設定問題

伊勢田 哲治

(名古屋大学 大学院情報学研究科)

それでは私のほうから、レジメに沿ってお話をしていきたいと思います。心理学は科学になるべきかどうかと、科学かどうかという話をするとき、科学というのは何となく了解されながらもよく分からないなという感じが多分、2人の発表の両方に多分あったと思います。科学を目指しませんというときに何を指してないのかよく分からないとかいうことがあります、それには科学とは何か、あるいは科学と科学じゃないものの境界はどこにあるのかという問いをどういう問いとして立てるのかというのは実はいろいろなレベルがあって、それがちゃんと分析できてないんじゃないかなというところが実は感じました。そういうようなところもあってこういうメモを用意させてもらっています(51ページを参照)。

### Table 1 なぜ境界設定をするのか？

- (1) 事実問題として 現に存在する区別を明らかにする。
- (2) 規範的問題として
  - (2a) 認識論的規範問題として 真理や正当化という観点からみて望ましいものとそうでないものを区別する。
  - (2b) 非認識論的(倫理的, 美的, 政治的)規範問題として 倫理的なよさ, 美しさ, 政治的な正しさといった観点からみて望ましいものとそうでないものを区別する。

それです、なぜ境界線かという境界設定問題、科学と疑似科学、あるいは非科学と、なぜ境界設定をなぜするのかということなんですが、いろいろなレベルで科学と他のものの違いは何かという問いがあり得るわけですね。ひとつは事実問題として、つまりどういう違いがあるのかというのを明らかにするという科学社会学的なアプローチもあります。

例えば科学というのを自然科学は科学なんだとって、それと似ているか違うかというレベルで科学かどうかという話をするとするのは、これは多分1のレベルの話だと思います。しかし私は「科学 = 自然科学」とか「科学 = 物理学」というレベルから出発して話を始めるのは非常に不毛な境界設定の問いの立て方だと思います。

2番目はそれとはちょっと違ひまして、規範的な問題として、「である」ではなくて「べし」の問題として考えましようというのが2番目です。その中でもいくつかアプローチが分けられまして、認識論的規範と哲学用語で言うんですけど、真理とか正当化という観点から見て望ましいか、望ましくないという意味合いで、そういう規範的な意味を持ったものとして科学という言葉を使う。そういう意味で科学的か科学的でないかという観点から問題を考えるというのが1つの問題設定としてあります。

もう1つは非認識論的な倫理学とか美学とか政治哲学とかいう様々な領域がありますけれども、そういう領域からの観点で倫理的な良さとか美しさとか政治的な正しさとか、そういった観点から見た望ましいものを科学と呼び、そうじゃないものを非科学と言いましようかという、そういう問題設定もあり得ると思います。

しかし少なくとも哲学の中で論じられてきた境界設定問題、線引き問題というのは、基本的には2-Aですね。認識論的な規範の問題としてこの問題を考えてきたはずですが、だから歴史的に見てこれは科学と呼ばれてきましたと言われても、科学者、哲学者がポカーンとするとかということがよくあって、いやそれは私の言っている話じゃありませんからというようなこともあるんですね。科学という言葉が、そういう認識論的な真理に近づくとか正当な信念を作るという意味合いでの望ましさを含意するからこそ区別が必要になる。そういう意味合いで境界を設定しましようという話なんです。

荒川さんの話の中で質的研究、あるいは心理学は科学を目指すべきかどうかという問いが繰り返し出てきていたわけですが、それは2-Aの観点から言えば、同意語反復的な問いで、当たり前で、2-Aの問いの範囲内では科学的なのが良いという前提で話が始まっているのであまり意味をなさないんですが、おそらく荒川さんなんかは考えられているのは2-Bですね、倫理とか美とか政治的な正しさという観点からこの問いを立てられてるんじゃないかと。それはやっぱり境界設定の問題と非常に密接な関係はあるけれども、別の問題として頭の中できちんと分けながら、平行して考えていかなければいけない問題だと思います。

私は境界設定の問題、科学を社会的に利用するときどういうふうにすべきかという問

題、両方を研究対象にしていますが、とりあえずここではまず境界設定の話、2Aの観点からの話をまずします。

私の本を読まれた方は私がこの問題にどういうスタンスを取ってるのかご存じかと思いますが、一応、簡単にこの問題に私がどういう立場を取っているのかという簡単な話だけちょっとしますと、これまで科学哲学の中でポパーさんとかいろんな人が境界設定、どこで線を引けばいいかということに関する基準を出しています。一番有名なのがポパーの反証可能性の基準で、反証可能でないような主張というのは科学的な主張ではないというような主張があったわけです。これは、いくらでも例外はありますよというようなことでその後反論がありまして、今ではあまり科学哲学の中で、それを真面目に受け取っている人はいない。同じような試みがいっぱいあったわけですが、どれもあまりうまくはいっていない。

それを踏まえて考えるならば、境界設定問題あるいは線引き問題として、どこで科学と科学じゃないものの線を引くかという問題というふうに言われてきたんだけど、実はこれは線を引こうという答えの出し方は間違っていて、むしろ曖昧な境界領域があることを認めながら、でもこれが望ましくてこれは望ましくないですよという形での解き方が必要なんじゃないか。曖昧な領域があることは白黒があることを否定はしないというのが一つの私のスタンスです。

それから総合的な判断として科学・疑似科学を区別しましょう。例えばさっきの反証可能性みたいな形で1つだけ、この点だけ見ればこれは科学的だと言えるというようなものはないだろうと。それはこれまでいろんな基準が失敗してきたことから明らかだろうと思います。

あともう一つ、こういう質的研究の科学性という話を考えるときに一つ重要な視点として、これはその本じゃなくて、もう一つさっきご紹介いただいた『認識論を社会化する』という本のほうで私が言ったことなんですが、原理的に不可能なことは義務にはできない。「べし」は「できる」を含意する。これも実はさっき名前が出たカントの、これは倫理学のほうでの主張なんですが、誰かに対して「お前が何かをするべきだ」とか言うからには、それは少なくとも相手にできることでなくてはいけない。「お前は明日の朝8時に起きるべきだ」と言うときには8時に起きることはできるわけで、できるということを少なくとも含意しているけれども、「お前は明日25時間働かなければいけない」と言われても困るわけですね。

これを境界設定問題について当てはめるならば、その研究対象については採用することが不可能な研究手法を要求することはできないはずだ。ある対象について研究するのに、このやり方では研究できませんというのに、このやり方で研究しなければお前のやっていることは科学じゃない、2 - Aの意味で科学じゃないと言うのは、これは不当な主張であろうと。

これを線引きの基準の形で言いますと、その下に文章の形で、なんだか哲学者の文章で回りくどくて申し訳ないんですがこんな形になります。簡単に書くとこんな形。ある研究分野において明らかにしようとしていることについて、もっと良い研究手法が存在するのに意図的にそれを利用しないで、その結果そのもっと良い研究手法を使えば達したであろう結論と大きく食い違うような結論に達した場合、このことはその分野が疑似科学的だと見なされるべきだとする強い理由になるだろうと。

要するに、例えば統計を取れば簡単に答えが出るのにわざわざといいますか、統計を取らないで直感だけで判断を下して、しかもそれに安住しているような、そういうような分野があればそれは疑似科学的だと見なされても仕方ないだろう。でも、この観点から言えば、統計を取れるような話題じゃない、例えばさっきサトウさんがおっしゃってたような主観的な色の体験ですね、そういうものが統計を取ることでその構造が明らかになるわけじゃないというような場合に、統計を取らないと言って怒るのは筋違いだろうと、それが私の基本的なスタンスです。

それで反対側にいきまして、じゃあ質的研究にその話を持っていったときにどうなるのかということですが、これはさっきの荒川さんのお話とかを聞いてて、あるいは最初の松本さんのまとめでもちょっと気になったんですが、質的研究というときに一応ちゃんと区別しなければいけないことがあると思って、純粹に方法論の話としての質的研究という話と、研究領域としての、研究の目標まで含めた意味の質的研究をちゃんと分けなければいけないと思うんですね。

例えば内的世界を明るみに出すとかというのは、これは質的研究で典型的に扱われる問題だけれども、質的研究と言ったときには、一応それは方法論の話としての質的研究という言葉を実際には使ったほうが良いと思います。「これを明らかにするために」というところまで含めた意味で質的研究という言葉を使ってもいいんですけども、それはやっぱりふたつを区別したほうが良いと思います。

私自身の科学哲学の中で社会学なんかを主に研究フィールドとしています。社会学では

この質的研究論争というのは100年ぐらいやっているわけですね。最初にウェーバーが自然科学のやり方では社会は明らかにできんと言って、その後、実証主義者がやってきてウェーバーは駄目だと言って、その後また1960年代ぐらいに、あんなサーベイなんかで社会が分かるかと言ってまた反論が出てきて、今はいろんな人がいろんな方法でやっているというような状況になっています。その中でやはり質的研究には一応、一定の場所を認めざるを得ないというのが社会学の中では、ここ数十年の共通了解になっていると思います。

例えばそういう文脈で、じゃあ質的研究はどういうところで行われているのかということなんですが、いくつかのパターンがあると思うんですね。1つには普遍的な行動とか統計的なパターンとかについて明らかにしようとしているんだけど、きちんとした計量的データを取るのが面倒くさいと。お金がないとか、そういう理由でインタビューで代用してしまうとか、そういうことが当然あると思います。

#### Table 2 質的研究が行われる文脈(たとえば社会科学において)

- (1) 普遍的な構造や統計的なパターンについて明らかにしようとしているのだが、きちんとした計量的データをとるのが面倒くさい(お金がない、など)
- (2) 普遍的な構造や統計的なパターンについて明らかにしようとしているのだが、きちんとした計量的データをとる方法が存在しない(現在なら質問票調査をするようなテーマについて、1000年前にどうだったか明らかにしようとしている、等)
- (3) 個別的な構造について深く明らかにしたい。
  - (3a) 明らかにしたいのは、客観的な構造や因果関係 (ある個人がどうやってアル中になったか)
  - (3b) 明らかにしたいのは、主観的な意味や解釈 (ある人や文化からみて世界はどう見えているのか?)

次に、同じようなものについて明らかにしようとしているんだけど、これは今度はデータを取りたいけど取れない。質問票調査をするようなテーマについて1000年前にどうだったか明らかにしたい。例えば男性と女性の家事の分担比率なんていうものに関して、1000年前の分担比率について知りたいというような、テーマそのものは原理的には質問票で測れるもので、同じタイプの質問を現在の社会学者も立てているわけだけれども、原理的に統計的データが存在しないというパターンもある。こういう場合には当然、文献調査とかいう形で質的研究がなされることになります。

もう1つのパターンとして、個別的な構造について深く明らかにしたい。明らかにしたいものにはいろいろなパターンがあって、客観的な因果関係ですね。ある個人のライフヒ

ストーリーというのがさっき出てきていましたけれども、ライフヒストリーについて明らかにするというのも、これは客観的に何が起きてきたのかということを知りたいという意味で言えば、その人に関する客観的な出来事の流れや因果関係がある。そこには例えば、どうやってアル中になったかという、どんな出来事があったってその人はアルコールに依存するようになったかというのを客観的な出来事として明らかにしたい場合もあるということです。これもあまり統計的なデータの取り方がうまくできるようなものではない。

さらに 3 - Bとして、これは村上さんがされているような研究が正にこれに当たると思いますが、主観的な意味や解釈について明らかにしたい。ある人から見て社会や文化はどう見えているのか、例えば先ほどのお話だと、ツキというものの構造について、人々がどう見ているのかということについて明らかにしたい。これは文化人類学と距離を置きたいなことを書かれてましたけれども、文化人類学ではまさに同じようなことをやっていますし、社会学でも同じようなことをやっていますし、いろんな研究フィールドで同じようなことをやっていると思いますが、それはあまり距離を置こうとしないほうがいいんじゃないかというのが1つの私の印象です。

これは1960年代に社会学でサーベイ的な調査法に対して批判が噴出したときに、やはり一番問題として、お前たちのやっていることではこれが明らかにできないんじゃないかというときに、一番代表として上がったのが3 - Bみたいなタイプの研究だったわけです。

こういうふうにいるいろいろな文脈を分けてみたときに、先ほどの線引きの基準と照らし合わせてみたときに1のような文脈で質的研究をして、つまり十分に量的な研究をする上での基盤もあるし、方法論もあるし、ただ面倒くさいからやらないというようなやり方である分野が成立していた場合には、それは先ほどの基準で言うと疑似科学的だとみなされる強い理由があるだろうと言わざるを得ない。例えば色の研究なんかでも、研究の内容次第ではこの1に分類されることが十分あり得ると思います。

しかし特に 3 - Bなんかに関しては、これも場合によっては計量的データを取ることができるかもしれないですけども、多くのものに関しては適当な計量的手法は存在しない。それは我々が明らかにしたい、知りたいと思うことなので、例えばどうしてこの人はこんなふうになる舞うんだらうということを理解するとき、その人から見て例えば「運」や「ツキ」についてどう見えているのかというのがやっぱり知りたいわけですね。知りたいことであるにもかかわらず適当な計量的な仕組みがないというものについて考えるとき、むしろ線引きの境界設定の考えから言えば、むしろこの質的手法こそがサイエンティフィ

ックメソッドなんだというふうに言うべきなんじゃないだろうか。

ですからそこでは引け目を感じるんじゃなくて、じゃあお前はこれを統計的な手法で明らかにしてみると言って開き直るとするのが正しい態度なのではないかと私は思います。

その中間がいろいろ、1と3-Bの間にはいろいろ中間的なレベルがあるわけですが、それはやっぱり個別的に考えなければいけない。先ほども言ったようにグレーゾーンが必ずあるわけですね、この境界設定という中に。それは考えていかなければいけないんじゃないかと思います。

このレジュメで扱えなかった話題で荒川さんが扱ってた話題で、社会的なリスクの問題とか社会に広まったときにどうするかという問題があります。これは確かにまた別の問題として最近非常に重要視されている問題ですね。科学技術社会論という分野で最近盛んに論じられている話題です。これもなかなか簡単には答えが出なくて、確かに一般論としては「科学的に正しいから広めましょう」はやばいと思うわけですね。これはいろいろな文脈で実際に起きていることですね。別にこれは心理学に限らず、生物学系のものですか、そういう研究でいくらでも起きています。

ただ、じゃあそういうところで2-A的な、認識論的な規範の問題、正しさとか正当化されているとか合理的であるという基準が、こういうところでは無に帰すのかというと、そんなことはないと思います。例えば社会政策を立てる上では、信頼できないデータよりは信頼できるデータに基づいていたほうがいいのことは当然やるわけです。もちろん信頼できるデータを得ようとするプロセスで、他の副次的な様々の問題が起きてしまう場合には比較考量はする必要がありますけれども、それはそういう問題があるからここでは違うやり方を取るべきだというほうに証明責任があると私は思います。

また、どのくらいある情報が信頼できるのか、客観的なのかという、これはやはり社会的な、科学的な情報・知識がいるんですね。社会的な政策決定とか意志決定とかいうものに使うときに必ず必要になってくる情報だと思います。それは科学と呼ぶか疑似科学と呼ぶかというのとはまた別に、言っていることの信頼性についてのきちんとした評価というのはやらなければいけないんじゃないかと、私はそういうふうに思います。

そういう意味では、先ほど荒川さんが「小説というのも有りです」とおっしゃってたのは、やっぱり小説だったらそれは小説ですということをはっきりさせなければいけないと私は思います。もしも小説なんだけれども、研究と呼ばれているために何かもっと信頼の高いものであるかのように見せかけてしまったとしたら、それはやはり問題がある。

あと、荒川さんのお話の中でもう1つ、量的な研究で多くのものを犠牲にしてきたというような形でいろんなものを上げられているわけですが、この問題の立て方は私はちょっと疑問がありまして、量的な研究をしたから失ったというよりは、量的な研究だけだったために起きた問題であったりするのではないかと。リテラシーの問題とか、あるいは正義の問題というものというのは、量的な研究にきちんとした科学社会学みたいな、科学と社会の関係に関するきちんとした理論が補われることによって量的な研究をきちんと社会の中で使うというノウハウがくっついてなかったために問題になっているのが多いんじゃないかと思います。

そういう意味では、量的な研究が問題なのじゃなくて、量的な研究だけを単独で使って、そのまま社会に当てはめようとしたところに問題があるのではないか、それはやっぱり区別すべきじゃないかという気がします。

というのは例えば化学でも生物学でも同じ問題が起きるわけですね。じゃあ化学や生物学の質的な研究にいきましょうというかという、質的な研究が適切な場面ももちろんあるでしょうけれども、多くの場合には解決の方法はこちらではなくて、量的な研究をしてきた化学とか生物学の研究内容に対して、さらに社会に当てはめるときにその不確かさとか、特に関係にかかわるような問題に関してはその影響でありますとか、そういうものについてのノウハウを付け足すという方向で考えるべきなのではと私は思います。長くなりましたが以上です。

質的研究と境界設定問題(メモ)

(当日配布資料)

てんむすフィールド研究会  
伊勢田哲治(名古屋大学)

1 なぜ境界設定をするのか

(1)事実問題として --- 現に存在する区別を明らかにする

(2)規範的問題として

(2a) 認識論的規範問題として --- 真理や正当化という観点からみて望ましいものとそうでないものを区別する

(2b) 非認識論的(倫理的、美的、政治的)規範問題として ---- 倫理的なよさ、美しさ、政治的な正しさといった観点からみて望ましいものとそうでないものを区別する

科学と非科学の境界設定は元来(2a)の観点における区分

「科学的」という言葉が認識論的規範の問題としての望ましさを含意するからこそ、望ましいものと望ましくないものの区別が必要になってくる。

「質的研究は科学をめざすべきか」というのは(2b) の観点からの問い

2 境界設定の考え方

・線を引かずに境界設定問題を解く(あいまいな境界領域があることは明白な白と黒の領域があることをさまたげない)

・総合的な判断として科学と疑似科学を区別(リトマス試験紙のような単独の基準はない)

・原理的に不可能なことを義務にはできない(「ought は can を含意する」)

境界設定問題にあてはめると、

その研究対象について採用することが不可能な研究手法を要求することができない。

線引き基準の形でいえば

「ある研究分野において明らかにしようとしていることについてもっとよい研究手法が存在するのに意図的に利用せず、その結果そのもっとよい研究手法を使えば達したであろうような結論と大きく食い違うような結論に達した場合、このことはその分野が疑似科学的だと見なされるべきだとする強い理由になる」

### 3 質的研究への境界設定問題の適用

質的研究が行われる文脈(たとえば社会科学において)

(1) 普遍的な構造や統計的パターンについて明らかにしようとしているのだが、きちんとした計量的データをとるのが面倒くさい(お金がない、など)

(2) 普遍的な構造や統計的パターンについて明らかにしようとしているのだが、きちんとした計量的データをとる方法が存在しない(現在なら質問票調査をするようなテーマについて、1000年前にどうだったか明らかにしようとしている、等)

(3) 個別的な構造について深く明らかにしたい

(3a) 明らかにしたいのは客観的な構造や因果関係 (ある個人がどうやってアル中になったか)

(3b) 明らかにしたいのは主観的な意味や解釈 (ある人や文化からみて世界はどうみえているか)

(1)の文脈での使用については疑問あり

(3b)については、われわれが知りたいことであるにもかかわらず、適当な計量的手法は存在しない。むしろ質的手法こそがこの文脈における科学的手法なのだと考えるべき

中間は？